

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

航空訓練参加の記

田 中 丈 雄

三重海軍航空隊にて

八月五日午前十時、我等の一團は關急香良洲驛より三重航空隊へ出發す。十時三十分の開講式があつて後、指導教官より本講習の目的、航空常識等に就てお話し下さる。晝食後、當隊の現狀並びに訓練に就いて講話がある。

夕食後一日で一番長い休みの時間がある。休息後吊り床吊りである。説明を聞いた後、練習生のを見學す。本部よりの擴聲機の「吊り床卸し、掛け!!」で一瞬隊内は地震の如く響き、物凄いい音がして、練習生の身體が彈丸の如く飛ぶ。そして見る見る天井にハンモックがぶら下つた。この間卅五秒である。我々では四分間ばかりである。十八時三十分より演習見學。演習とは豫習、復習である。二十時より實戰談、M少佐より聽講六時間海上に漂流した實驗談に心を躍らす。

廿一時巡檢用意、巡檢とは艦内に於いては副長が艦内の整頓就寢状態を見るのであつて、當隊は分隊長が巡視するのである。この時不都合があつた時は處罰される。廿二時就寢す。

第二日四時半起床、定刻より一時間早かつた。五時朝禮、隊内は靜かにまだ、夢の内である。すがすがしい空氣を胸一ぱい呼吸した。五時十分總員起し。十五分にして吊り床收め、洗面等雜務を終り、全隊員朝禮、御製拜誦が行はれた。食後、講話引續き隊内見學、十時より地上演習機の實施、適性検査の概要説明がある。

晝食後、午睡、午睡後昨日と同様、體操、劍道あり。入浴、夕食後、十八時三十分より豫備學生出身の若い士官と座談會あり。愉快な人であり、我々の質問によく答へて呉れた。

第三日、五時總員起し、朝禮、掃除、食事、六時四十分、航空隊發、待望の鈴鹿航空隊へ。

鈴鹿航空隊にて

關急白子驛發自動車にて鈴鹿航空隊へ、一路邁進す。隊着後練習機飛行場へ向ふ。それより同乗飛行なり。同乗飛行の諸注意を指揮官より與へられる。飛行服に身を固めて、指揮官の前に報告するのである。「田中講習員〇〇號、空中操作、同乗出發します」と。三式練習機に同乗した。始めての同乗飛行であ

るので血沸き、肉躍るのである。發動機が動き出し、地上を走り、離陸、上昇し、高度四百二十米の所に左旋回した。高度計、速度計、壓力計等を見てゐた時に、急降下した。全身がひきしまる。伊勢灣の海岸線を北上した。降下、上昇數回の後水平飛行、伊勢灣の彼方に地平線が薄いもやに包まれ、眞下には青い水田と道路が白く光り、電車がマツチ箱を並べた様に走つてゐる。眞に絶景である。陽光は頭上に輝き、機の影が地上にその雄姿をうつしてゐるのである。上昇、降下、旋回、數回の後、大きく左旋回す、後次第に着陸準備、機首をさげ遂に着陸す、同乗飛行は終つた。飛行時間約二十分間であつた。

以上簡單ながら三日間の訓練の日程を書き記したのである
我々の訓練は僅か三日間であつたが、その間に得た経験は尊

いものであつた。即ち航空の一般常識を養ひ、又實際體驗したのである。航空隊の生活は己を没して唯一途に邦家に盡す、の一語で表現することが出来る。これは佛教の没我の精神と全く同じである。軍人精神と佛教精神と同じであると言へよう。我々は宗教を學び、そして宗教に生きているのである。吾が佛教専門學校も軍隊とその根本を同じうする。在校生諸君!! 歴史ある當校を日本一の學校に作り上げようではないか。そして非常時日本の佛教學徒として、又帝國臣民として、大君の爲に一身を捧げようではないか。私は敢て言ふ。米英の學生に敗けるな。そしてこの航空決戦の時、一人でも多く大空へ舞ひ上り、空の決戦場へ行こうではないか。